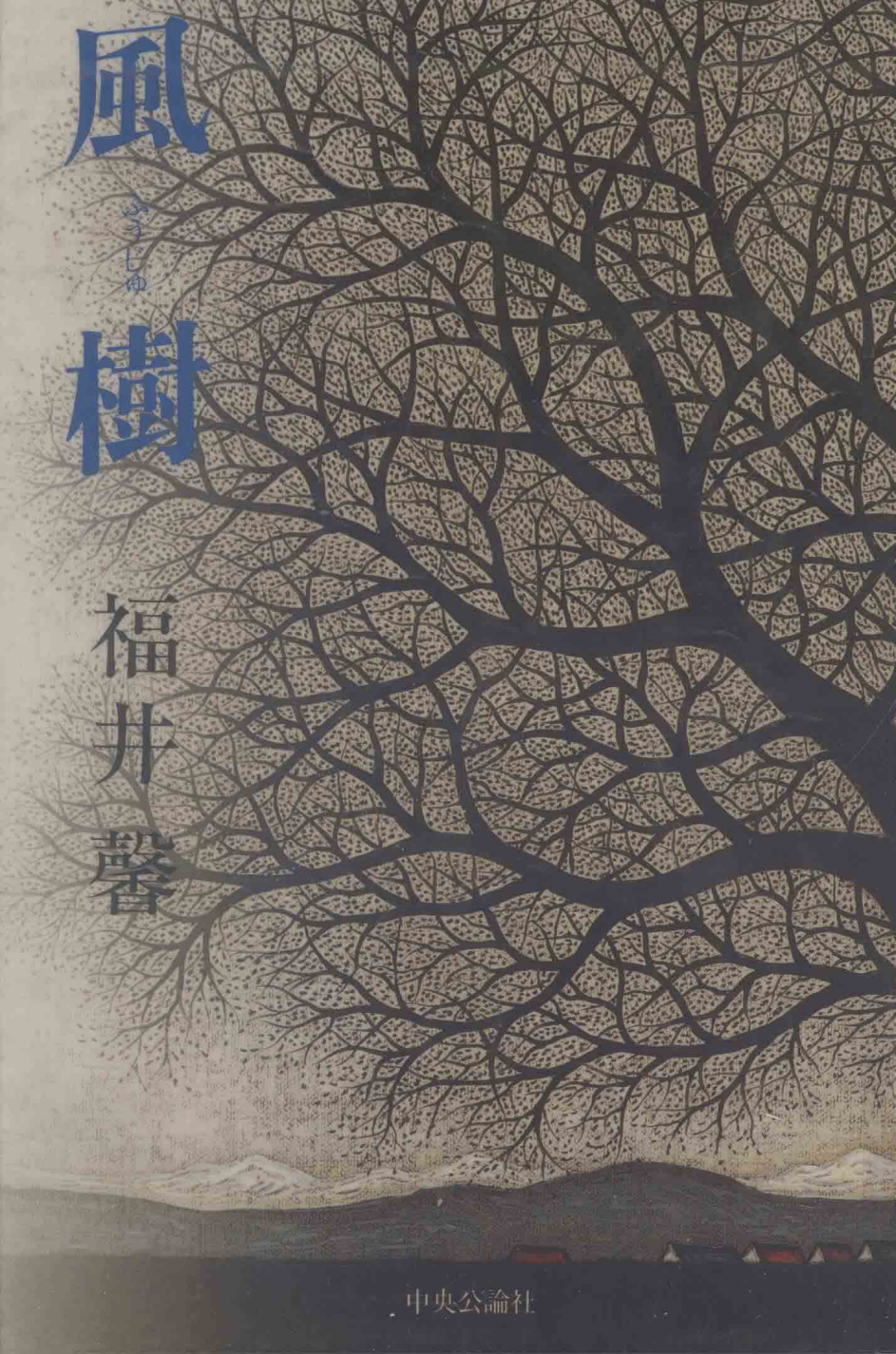




風

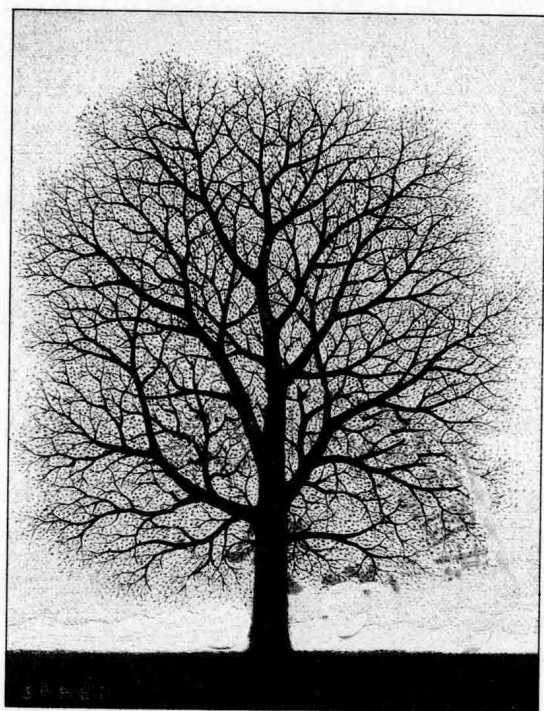
ふしゆ

樹

福井馨

中央公論社

風 ふうじゅ 樹



福井 馨

定価一五〇〇円

風 樹 ふうじゅ

昭和六十年八月十日初版印刷
昭和六十年八月二十日初版発行

著 者 福井 馨

発行者 嶋中鵬二

印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社

〒104東京都中央区京橋二ノ八ノ七

振替東京二一三四

©一九八五

検印廃止

ISBN4-12-001412-6

風

樹

東京から帰ってきた息子の哲と一緒に、三国へ蟹料理を食べに行こうと云い出したのは、母の榮子であった。越前蟹、とこの地方で呼ぶずわい蟹が、漁期に入っていて、この暮から来春早々にかけてのころが、いちばん身もしまっているし、味もよいのである。

「あと何年生きられるか、分かんでの。美味しいもの、食べられるうちに食べておかんと、損やわ」

そんな榮子に、平吾は双手をあげて賛成するでもないが、反対して出洩るというのでもなかった。

お互い、老い先の短い身ではある。喜の字の祝いに近い年齢になっていた。だからと云って、平吾には、物見遊山や食い道楽といったことに、老妻ほどの執着はないようであった。

ひとつには、永い間の新聞記者生活で、そんなことはさんざんにしつくしたからもう沢山、という気もあるう。もっとも、その点では、榮子だって、若いころからお茶とお花の師匠をして過し、折りあるごとに名所見物や食べ歩きに出かけていたのだった。老来とみに枯淡の度を増す平吾の一方で、榮子の欲望は一向に衰えをみせない。生活力旺盛である。

長身で衣紋竹のように肩の張った父と、じゃが芋のようにころっとした肥満型の母と、性格の上でも異ったところの方が多いのに、似たもの夫婦と他人眼にはうつるにちがいない父母の、ここまできた生活の歴史を、哲は、自分の半生を振り返るといふ意味からも、何彼につけて思い起さずにはいられない此頃なのである。

予定していた日曜日は、あいにくの曇天であったが、哲たちは福井駅で京福電鉄に乗った。

三国は、電車で一時間ほど行つた先の、古くからひらけた港であった。近くに奇勝・東尋坊を控えた観光地でもあり、夏場は海水浴客で賑うのだが、今は訪れる人も少く、駅に着いてみると、あたりはただ寒々しく、閑散としていた。

タクシーの人待ち顔の運転手に、

「ひさご屋に行つてちょうだい」

と、栄子が声をかけた。気乗りのしない手つきで運転手がドアをあけたのは、そこが程ない距離だからだろうか。

「お客さんら、ひさご屋に、何食べに行きなはる？」

「蟹料理や」

「ひえーっ」

助けを求めるような声を運転手はあげた。ちかごろ、蟹は異常な高値を呼んでいた。ハンドルを右に切つた運転手が、

「ひさご屋は、ただ看板で高い金を取るだけのもんやけどの。それより、魚屋で、安うて新鮮な

やつ食った方がよっぽどましやで」

運転手は、土地の客ではないと踏んで、親切心から話しかけてきたのかも知れない。そう云えば、わざわざ東京あたりからこの浜の魚屋に、いわば穴場として、食べに通う者がいると聞いたのを、哲は思い出した。店の奥か二階かに、一応の座敷がしつらえてあるのであろう。さり気なく哲が、

「そういう魚屋の、美味しいのかな」

「旦那」運転手は顎をしゃくり上げた。「舟出^だいて獲^とつてきて、すぐ料理するんや。まずいわけないでしょうが」

「なるほど」

「どうです。ええ店があるので、案内しましょか。ひさご屋は、高いばかりで、あかん」

察するに運ちゃんは、どこかの魚屋と何等かの契約を結んでもいるのであろう、などと哲が思いをめぐらす暇もなく、栄子が、

「私ら、ひさご屋に行くんです。やっぱ、名の通ったとこでないと、美味しゅうないで」

「ほうけ」

鼻白んだように、運転手は帽子をかぶり直した。左手に海のひらける海岸通りに車は出た。

海の遠くに眼を置きながら、哲は、如何にも栄子らしい口のきき方だな、と先ほどの運転手とのやりとりを反芻^{はんすう}していた。下手な遠慮や気兼ねなど、栄子はしない。涙もろくもあるが、気性も強く、だから他人との摩擦や誤解も絶えないことだろうと、哲は眺めていた。そんな栄子のた

めに、平吾の温厚実直な人柄がいつそう浮き彫りにされてみえ、しかもそれらが渾然と一体をなしているのだから、夫婦の結びつきほど味のあるものはないというべきか。

——もっとも、おやじの方じゃ、魚屋でもいい、と運転手に云いたかったことだろうが……。

胸のうちに呟くと、哲はおかしくなるのだった。しまつ屋で、実利を第一と心得る平吾ではあった。

そんな夫の、いわば生活信条に、栄子が不服を感じていたというのではない。たかの知れたサラリーマンなのだから、ちまちまと生計を切りつめなければ暮してゆけないのだと、むしろ栄子の方が儉約を旨としているくらいであった。ただ、平吾と違う点は、時として羽目を外すということだ。そしてその羽目の外し方が、昨今、まことに頻繁なのである。その栄子は今一途に、一度は行きたいと思っていたひさご屋の蟹料理の味を舌の上に描き、胸をわくわくさせているのにちがひなかった。

しかし、緩い勾配の坂道を上って行った先の、海に突き出た低い崖の上に立つその料亭は、哲が想像したような小粋なものではなく、小ぢんまりした、どこか田舎町の旅館めく玄関のたたずまいであった。

車から下りる客を見て、女中が出迎えるというのでもなかった。のんびり閑としたさまも、如何にも北国の漁港の料理屋らしくていい、というふうに見て取るべきなのか。

「ほ、生きた蟹がいるわ、お父さん」

栄子が、正面の階段の上り口にある大きな水槽に眼を止めた。一匹の蟹が、標本のように此方

に背を向けて足をのばしていた。

「あんなの、料理するんやろか」

「まさか」

哲は、笑った。ちかごろは料理屋でも冷凍ものを出すということだが、ひさご屋ならそんなことはあるまい、と栄子は云っていた。生きてはいないにせよ、水揚げしたばかりの蟹をここでは出しているのだ、とほっとしたような顔を栄子はした。

ややあつてから、三人は、女中の案内で二階に上り、海の見下ろせる部屋に通された。客はいないとみえ、部屋部屋はしずもり返っている。

半畳の置炬燵に足を入れると、女中がお茶など卓上に並べながら、おっとりした口調で、越前蟹は美味しいというので、ご遠方からわざわざお出でになるんでございますよ、と笑みを浮べて話しかけてきたりした。女中が出て行ったあとで、哲が、

「どうやら僕たちも、ご遠方から御入来のお客さんにみられたようだね。いっそのこと、そういうふりをして通そうじゃないか」

「ほや、そのほうが面白いわ」

栄子が腹を揺るようにして笑う。東京育ちの栄子は、この齢になっても、言葉が土地の訛りになりきっていないのであった。

おそろしく古風で頑丈な窓枠の硝子に、海の風が強く当っている。窓の下の方屏風岩の裾に波が白い牙をたてていたが、音はここまでは届いてこなかった。

女中が、襖をあけて入ってき、丸ごと茹でたずわい蟹を三ばい、大きなアルマイトのボールに入れたのを前に置くと、

「お待ちせいたしました」

でん、と蟹を卓上に据え、小さなボールと二杯酢の小皿を、三人に配るのである。ビニールの風呂敷ほどのものを渡し、胸の前にひろげるようにと云いながら、栄子に、

「この蟹の食べかた、ご存知ですか」

「あ？ いいえ」

食べかたと云っても、別に仔細のあらうわけはない。蟹はきちんと足をたたまれ、手に取ると、まだ熱かった。女中が説明する傍で、栄子は、慣れた手つきで、甲羅を外した。

「この背中のみそが、また美味しゅうございましてね。酒の肴に、もってこいなんです。あの、お酒、いかが致しましょうか」

「いや、飲めないものばかりだから……」

ではごゆっくり、と女中が深く頭を下げて出ていった。ぶつ、とこらえていたものを一気に吐き出すように、栄子が吹き出した。大笑いになった。哲が、

「蟹料理というから、何が出てくるのかと思ったら」

「ただ茹でてあるだけのものや。そう云えば、私の友達、三国で蟹を食べたとは云ってたけど」

「蟹料理、とは云わなかったんだね」

「うん」

「甲羅蒸しや、みそを甲羅の皿につけて出すのも、蟹料理のうちなんだろ」

「はやけど、こういうとこで、こんなふうに素朴な食べ方をするのも、また別の味があるというもんですよ」

足の細い方で、ところてんのように太い方の身を突き出し、すっ、すっ、と空殻をすすった。何事によらず、もっともらしい理屈をつけて相手を承服させようとする癖が、栄子にはあった。そのきらいは自分にもある、と哲も認めてはいる。親子の血は、争われないのであった。

哲は東京で、越前の蟹料理とか鳥取の松葉蟹を出す料理屋の看板を眺めてはいたが、入ったこととはなかった。そんなところのお座敷で、板前が庖丁を入れたものに箸をつけるのより、手づかみのこうした食べかたの方に、やはり、蟹本来の味があるのだと、栄子を見返しながら哲も思ったことだ。

「蟹を食べると、鳥取を思い出す。蟹にはふるさとの味があるね、お父さん」

平吾たち左近寺一家にとって、鳥取が生れ故郷であるとするならば、福井は第二の故郷なのであった。

「お母さんは、初めて鳥取に来て蟹を食べたとき、なんて美味しいもんやろと思ったわ」

「港から、漁師が売りにくる。まだ生きていて、泡を吹きながらさがさこそと縁の上を這っていたっけ」

哲には、遠い少年の日の思い出であった。鳥取市の郊外の、賀露という漁港のある町に平吾の生家があり、哲もその祖父母の許で、数年を過したものだった。

「越前蟹も、鳥取の蟹も、一つ海と同じ蟹なんだね。日本海には、平家蟹はいなかったかな」

「あれは、瀬戸内海のものさ」

平家蟹は、足の長さが不揃いで、甲羅が人面に似ているところから、西海に没した平家の哀話と結びつけられていた。この蟹は食べられないのだという。

胃弱の平吾は、ゆっくりと口を動かし、一ぱいの蟹をもてあまし気味のようだった。栄子は、忽ち大ボールを殻の山にしたいらげ、平吾の分にもで手をのばした。

「せこ蟹、な」

胃薬をとり出しながら、平吾が、

「あれの、赤い子も、うまいなあ」

ずわいの雌をここでは背子蟹と呼ぶが、鳥取では親蟹である。小ぶりだから足も細く、哲は子供このころ殻ごと嚙んで身を出したりしたものだ。

「昔は、よく、おやつ代りにして食べていたっけ。炬燵の上に新聞紙をひろげて、ざる一ぱい茹でたやつに、ぼりぼりと歯をたてた。甲羅の顔のところを押すと、そこからも子が出てきた」

「あれは、うまい。腹のつぶつぶの子は、それほどの味でもないが」

平吾は、子のうまさに拘泥ってばかりいるようだ。安くてうまい、と云いたいのであろうが、それもさることながら、幼い日を懐しむ心も動いているのだと、哲にも分かるのであった。間食と云えばさつまいものふかしたものや、焼きするめといったもののしか、古き時代の片田舎の子には与えられなかった。哲も、そういう時代を経てきていた。それらがむやみに懐しく思い出され

るというのも、齡をとったからなのか。

食べ終って手を拭く栄子と、哲の眼が合った。さぞ満足したことであろう、と母の表情を読みとろうとすると、思いもかけず、

「これ、冷凍ものやな」

と、ぶっきらぼうな声が返ってきた。

「そんな……どうして？」

「身がぼんぼんに張りすぎてるもん。まだ、そんな時季ではないやろに」

十二月も半ばに近いのだから、身はしまってきている筈である。町の魚屋あたりには、こういう上等なものが出まわらないだけのことはないのである。平吾が、

「お前、舌がどうかしとるんじゃないのか」

「お父さんは、味音痴やで、私には、ちゃあんと分かるんです」

哲にも、しかし、冷凍の味とは思えないのであった。仮にそうだとしても、結構いただける味のだから、それで十分ではないのか。ただ、栄子にすれば、なにも冷凍ものを食べるために、わざわざ三国くんだりの料理屋まで来るいわれはない、と云いたいのかも知れなかった。

2

ひさご屋を出ると、平吾たちは坂道を下りていって、浜辺の方へ足を運んだ。

遠浅の渚に寄せる波が、弓なりの弧を画いて見はるかす風景の彼方まで延びていた。

「一匹の蟹って、ずいぶんボリュームがあるんやのう」

渚へ向って歩きながら、栄子が云った。

「高いで、残すの勿体ないと思ったんやけど、なんや、胸が悪うなってきたわ」

また、冷凍のせいにするのではないかと、哲は母を見返したが、栄子は帯の上に手をあてたまま、ずんずん海の方へ歩いていった。

風が肌を刺すように冷たい。あたりが薄暗く見えるほどに、時が思いのほか過ぎていたのであった。

「鳥取の海と似ている。同じ日本海だものね」

平吾に肩を寄せるようにして、哲は立った。こういう曇り日の暗鬱な海の色には、どこか、裏日本の人々の生活を象徴するものがひそんででもいるようだ。ふっと、哲には、わが一家が、鳥取の海からこの岸に流れ着いた一片の木の葉か何かのように感じられた。

「賀露も今では結構、にぎやかな海水浴場になっているということだ」

父に云われて、哲も少年のころを振り返るのである。当時、賀露の海に、浜茶屋のようなものは出ていなかったように思う。泳ぎにくる人も、疎らだった。平吾も、子供と泳ぎに行くことなど、滅多になかったのではないか。

もっとも、少年の記憶には、鮮やかな黒い水着の母の姿があるのだった。父もそこにはいた。

母は、ただ、砂の上に座っていたり、波打際で足を濡らしたりするだけだった。哲の妻の真理も、

子供と一緒に江の島に行ったとき、やはりそのようにしていたものだと思ひ出した。真理は何級とかの泳ぎの腕を誇っているが、子供はついにそれを見なかったことになる。

哲は、泳ぎは駄目であった。哲には、海水浴より、帰途祖父の家にまわったとき、好物の西瓜を祖母が出してくれた思ひ出の方が懐しい。

「来年の二月は、おばあさんの十七回忌になるんだねえ」

「うむ。寺から通知がきていた。都合を知らせろ、とな」

「法事に帰ってこいというわけか」

「返事を出しておかなくちゃならん」

浜の右手は岩場になっていて、栄子がひとりの海女に話しかけていたが、やがて此方へ連れだつて戻ってきた。

岩海苔はないか、と海女に訊いたところ、少しならあるというのでこれから貰いに行く、と云うのであった。岩海苔は、冬の日本海の岩場の、波を浴びるあたりに自生するものであった。

「わざわざ貰いに行くほどのものかね」

「ついでだからだろう。うまいと思わんが……」

もともと平吾には、栄子のいう味音痴ほどではないにせよ、食べ物に淡泊というか、無関心なところがあるのだった。

栄子が小路の奥まったあたりの漁師の家から、しばらく出てこないで、どうかしたのかと、平吾がそちらに歩いていった。

置き去りにされ、あらためて哲は海へ眼を向けながら、自分ひとりの思いに沈むのである。哲は真理と新婚の一夜を、芦原温泉で過した。翌る日、この三国に出て、浜辺を歩いたりしたものだ、

——あれは、どのあたりだったのだろうか。

遠く、波の白い線を眺めやるのだったが、哲の病んだ眼には、風景はただ模糊として、霞を通したようにうつるばかりであった。

結婚して数年後、哲は眼病を患った。入院先の病床で祖母の死を聞いたのは、その翌春のことであった。哲を可愛がってくれた祖母であったが、葬式には行けなかった。来年が十七回忌に当るということは、その年月の間、不自由な眼で暮してきたわけだと考える。

——闘病生活、という大袈裟だが、とにかく長い眼病とのつきあいではあった。真理が病院に連れてきたよちよち歩きの夏樹が、もう高校生なんだものな。

さらに今後とも、死の床に横たわる時まで、眼病をお伴の生活がつづいて行くのだと思わないわけにはいかなかった。最近はまだ一段と、視力が衰えてきていた。

父と同じように、哲も新聞社に勤めていたが、視力に不便を感じるにつれて、欠勤がちになり、現在は休職の身なのであった。

体はびんびんしているのだから、病人もどきに寝てばかりはいられない。といって、動きまわる自由は束縛されているのであった。不得要領な病気ではある。それが、何彼と、哲を焦燥にかりたてさせていくものようであった。